

## 教育委員会会議の議事録（平成29年7月臨時）

◆ 日 時 平成29年7月12日（水）午後2時03分から午後5時28分まで

◆ 場 所 仙台市役所第2委員会室

◆ 出席委員 教育長 大越 裕光  
教育長職務代理者 吉田 利弘  
委員 今野 克二  
委員 齋藤 道子  
委員 加藤 道代  
委員 花輪 公雄  
委員 中村 尚子

### ◆ 会議の概要

1 開 会 午後2時03分

2 議事録署名委員の指名 加藤 委員

### 3 協 議 事 項

平成30年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択について

（1）仙台市立小学校で使用する教科用図書【特別の教科 道徳】

（教育指導課長 説明）

教育指導課長 平成30年度に使用する小学校用教科書については、新たに特別の教科道徳の教科書を採択する。それ以外の教科書については、平成28年度と同一の教科書を採択しなければならないこととなっている。同じく平成30年度に使用する中学校用教科書についても平成28年度と同一の教科書を採択しなければならないこととなっている。

学校教育法附則第9条の規定により、特別支援学校の小学部及び中学部並びに特別支援学級において使用する教科書以外の教科用図書、一般図書の採択に当たっては、教科の主たる教材として教育目標の達成上、適切な図書を選定することとなっている。

以上のことから、本日小学校特別の教科道徳の教科書と特別支援学校、特別支援学級で使用する一般図書についてご審議いただき、7月28日の定例教育委員会で小学校特別の教科道徳の教科用図書、特別支援学校・学級用一般図書の順に採択をお願いしたいと考えている。

なお、7月10日に平成29年度仙台市立義務教育諸学校教科用図書協議会から教育委員会に対して報告が行われた。協議に当たっては協議会の報告書や調査研究委員会報告書などの内容も参考にさせていただきようお願いします。

教 育 長 あらためて配付資料について説明を願う。

教育指導課長 資料1は、宮城県教育委員会から示された教科書の採択に係る基本方針である。

資料 2 は、同じく宮城県教育委員会から示された平成 30 年度使用教科用図書採択基準、小学校特別の教科道徳である。これは県内各採択地区において適切な採択を確保するための援助として、宮城県教育委員会が作成したものである。

資料 3 は、同じく宮城県教育委員会から示された学校教育法附則第 9 条の規定による教科用図書、一般図書の採択基準である。

資料 4 は、6 月の臨時教育委員会で議決いただいた平成 30 年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択方針である。採択の観点は（1）から（16）である。

資料 5 は、新たに採択する小学校特別の教科道徳教科書見本本の発行者一覧である。

続いて、別紙資料について説明する。

別紙資料 1 は、「平成 30 年度仙台市立義務教育諸学校で使用する教科用図書の採択対象となる教科用図書について（報告）」である。有識者、保護者代表、校長から構成された協議会において小学校で使用する特別の教科道徳の教科書の特長及び特別支援学校、特別支援学級で使用する一般図書をまとめたものである。

協議会においては、多面的・多角的な分析をいただき、小学校特別の教科道徳の教科書見本本について有識者の方々からは、命について重点的に扱われるような工夫がされている、子どもたちが考えを深められる構成になっているなどのご意見を頂戴するとともに、保護者の方々からはいじめ防止を重視していてさまざまな事例から子どもたちが考えることができる、命の大切さを自分で考えられるようにしているなどのご意見も頂戴したところである。

一方、特別支援学校、特別支援学級で使用する一般図書についても、児童の興味を引く内容になっている、生活の中で生かすことができるなどのご意見を頂戴したところである。

別紙資料 2 は「平成 30 年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書に関する資料 1」である。（1）は調査研究委員会報告書である。校長及び教頭で構成された調査研究委員会が道徳の見本本の調査研究を行い、道徳科の目標と仙台市の採択の観点に沿って各教科書見本本の特長をまとめたものである。

（2）と（3）は調査研究委員会の下部機関である専門委員の報告書である。小学校教諭で構成された専門委員が各教科書見本本の特長をまとめたものである。

別紙資料 3 は、「平成 30 年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書に関する資料 2 一般図書」である。（1）は校長から構成された調査研究委員会が一般図書について調査研究し、一覧及び報告書にまとめたもの、並びに教諭から構成された調査研究委員会専門委員が一般図書について調査研究し、まとめたものである。

別紙資料 4 は「平成 29 年度仙台市立義務教育諸学校教科用図書協議会議事録」である。

別紙資料 5 は、宮城県教育委員会から示された「平成 30 年度使用教科用図書採択選定資料 小学校用」である。宮城県教育委員会が採択基準の四つの枠組みについて特別の教科道徳の教科書見本本の全発行者の特長をまとめたものである。

別紙資料 6 は、宮城県教育委員会から示された「平成 30 年度使用教科用図書小学校選定資料 特別の教科道徳（別冊）」である。宮城県教育委員会が小学校特別

の教科道徳教科書の採択に向け、採択権者が調査研究するための参考となるよう、従来の選定資料に加え、各教科書の特長等を一層明確にし、記載内容やその分量を比較できるように作成したものである。

別紙資料7は、平成29年4月に文部科学省から示された「小学校用教科書目録（平成30年度使用）」である。

なお、別紙資料1から4については、公正・公平な協議という観点から、採択終了まで非公開としている。そこで、傍聴においでの皆様へは資料を配付しないこととしている。採択後には当該資料も市政情報センターにおいて閲覧できるようにするのでご了承願う。

別紙資料5、6については宮城県教育委員会のホームページに、別紙資料7については文部科学省のホームページに公開されている。

配付資料については以上である。

閲覧資料として6月に仙台市内の三つの教科書センターと五つの市立図書館で実施した教科書展示会場における市民アンケート結果、また、各学校が教科書展示会において調査研究し、まとめた採択希望に関する資料、団体から教育委員会に送付された要望書、以上3点がある。閲覧資料は教育長の机上に用意しているので、必要に応じて供覧いただきたい。

さらに、各委員の机には特別の教科道徳教科書見本本と編修趣意書を準備している。

教 育 長      ただいまの説明について何かご質問はあるか。  
(質問なし)

教 育 長      これからの進め方についてお諮りしたい。

本日は今年度の採択対象となる小学校特別の教科道徳の教科書と一般図書についての協議を行う。道徳の教科書については事前に事務局が届け、本日まで実際に教科書見本本をご覧いただいているものと思う。そこで、この場では特別に閲覧の時間は設定せず、協議に十分な時間をとるようにしたいと考えている。

協議の進め方については、まず事務局から学習指導要領における特別の教科道徳の目標などについての説明を受けた後、実際に教科書を手にとりながら協議を行うこととしたい。

協議については、はじめに各委員から仙台市の採択方針の観点1から16を踏まえて、また、協議会や調査研究委員会報告書等も参考にしながら、発行全8者の特長についてご意見をいただきたい。

各委員から一通りご意見をいただいたところで、2者ないし3者程度の教科書見本本についてご推薦をいただきたい。それらの意見を踏まえて再度仙台市の採択の観点に沿ってご意見をいただき、絞り込みを行い、議論を深めて、全員の合意のもと1者に決定したい。

なお、協議の適正さ、公正さを確保する点から、本日の協議においてご発言において具体の発行者名についてはお手元の対応表に従い、発行者名ではなくA者、B者と呼ぶようにする。なお、A、Bは発行者の頭文字ではない。

小学校道徳についての審議が終了したら引き続き特別支援学校・学級用の一般図書について審議する。本日の議論を踏まえて28日の定例教育委員会で確認の上、採択に係る議決を行いたいと思う。

以上の進め方について何かあるか。

(質問なし)

教 育 長

では、これからこのような進め方で審議に入りたい。

小学校特別の教科道徳について協議を行う。事務局から学習指導要領の目標等について説明願う。

教育指導課長  
道徳担当指導主事

道徳担当指導主事から説明する。

小学校特別の教科道徳では、小学校学習指導要領第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標、「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断のもとに行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」に基づき、その基盤となる道徳性を養うため、児童が道徳的諸価値についての理解をもとに自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることを目標としている。

道徳教育は、昭和33年の学習指導要領において小中学校に各学年週1単位時間の道徳の時間が設置されて以降は、この道徳の時間を学校における道徳教育の要として、学校教育全体を通じて児童の道徳性を養うこととしてきた。

これまで学校や児童生徒の実態などに基づき、道徳教育の重点目標を設定し、充実した指導を重ね、成果を上げている一方、例えば主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話し合いや読み物の登場人物の心情の読み取りのみに偏った形式的な指導が行われる例があることなどの課題が指摘されてきた。

さらには、教育再生実行会議において道徳教育がいじめ防止に大きな効果が期待できること、学校教育の真の中核としての役割を果たせるようにすべきなどといったことが挙げられた。

このような状況を踏まえ、道徳教育の充実を図るため、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育とその要としての道徳の時間の役割を明確にした上で、児童の道徳性を養うために適切な教材を用いて確実に指導を行い、指導の結果を明らかにして、その質的な向上を図ることができるよう、平成27年3月に学校教育法施行規則及び学習指導要領の一部を改正し、道徳の時間を教育課程上、特別の教科道徳として新たに位置付け、その目標、内容、教材や評価、指導体制のあり方等が見直しが図られた。

特別の教科道徳の授業では、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う、「考え、議論する道徳」への転換を図ることが求められている。

内容については、大きな社会問題となっているいじめ問題への対応のため、発達の段階や特性を踏まえ、良いことと悪いことを区別し、正しいことを進んで行い、自立心や自立性を育てる。善悪の判断、自律、自由と責任や生命を尊重する精神を育む。生命の尊さ、他者を思いやり相手を受け入れる心を育てる。親切、思いやり、相互理解、寛容、友情、信頼などの指導内容の重点化を図ることが挙げられている。

社会を構成する一員としての主体的な生き方に関わることや規範意識、法などのルールに関する思考力や判断力を養う、規則の尊重、公正、公平、社会正義な

どについても充実が必要と示されている。

教 育 長 ただいまの説明に対して何かご質問等あるか。

今 野 委 員 今回、道徳が新たに教科になるということで、内容も相当良い形になると期待しているが、その中で、この道徳教育が時代とともにどのように変わってきたのか、簡単に教えていただきたい。

それから、今回、教科となることで、以前の教材に比べてどれだけ内容が充実したのか、そのあたりもご説明いただければと思う。

道徳担当指導主事 1958年、昭和33年から道徳の時間が小中学校で週1単位時間、年間35時間設けられた。それから、今回、副読本から教科書になり、教科書になるとともに指導方法についても改善が求められている。子どもたちが読み取りだけではなく、自分との関わりで考え、他者、友達同士と対話しながら自分の生き方についての考えを深められるような教材が選定されている。

今 野 委 員 すべてに目を通して見て、よくこんなに短い文章でこれだけの感動的な文章を集められたなと思ったが、これまでの副教材にも使われていた教材も入っているのか。全体を見てみると、8者のうち複数者に出ている教材が4割くらいあるように思うが、以前も同様か。あるいは新しい内容になっているのか。

道徳担当指導主事 教材の中身については、文部科学省が発行している「私たちの道徳」や、その前に発行している指導資料の中から、定番として引き継がれていた教材は各者とも取り入れられている。

さらに、今回は、いじめ問題が背景に大きくあるので、いじめに関する内容項目、親切、思いやり、公正、公平、社会正義、生命尊重のあたりの教材を充実して、各者とも入れている。

教 育 長 副読本にあった教材で、今度の教科書でもまた使われているものもあるのだろうか、そこはどうか。

道徳担当指導主事 各者、副読本と教科書と並べて比較すると、やはり副読本の中でも良いと思われる教材はそのまま引き継がれている。

教 育 長 全く新しいものだけというわけではないということのようである。

また適宜ご質問等あればお受けするが、まず、委員の皆様一人一人から、今回、目を通していただいた8者の教科書についてご意見等をいただきたい。

今 野 委 員 全体的な感想から入らせていただきたいが、こういった本を1回読んだだけで、自分の行動を良い方向に変えられるという児童は非常に少ないと思う。繰り返し反復し、手を替え品を替え、頭の中に記憶として定着させることが必要だろう。それですら行動に結び付けるのは難しいと思うが。

そう考えてみると、子どもたちがせっかく「こういう行動が正しいんだ」と意識しても、周りの大人が正しいことができなければ、「教科書に書かれていることと、実際は違うんだ」というようなことが起こりかねないので、我々大人がしっかりしないとだめだと感じた。我々親世代あるいは祖父の世代から道徳の本を読む、あるいは自分の子や孫と一緒に読んでみるような機会があると非常に良いと思う。

身内の話で申し訳ないが、孫の母親は食事をするときはテレビを見ないという習慣である。恥ずかしい限りだが、私は、子どもたちが小さいうちからテレビでニュースやマンガを見ながら食事をしていたので、会話がなかった。ある日、孫

が来て、私がテレビを見て食事していたところ、「おじいちゃん、食べながらテレビを見ていいんですか」と言われてしまったので慌てて消した。道徳教育というのは本当に親、地域ぐるみ、もちろん学校が大切なわけだが、その辺できちっとやっていかないといけないと思った。先生方がまず見本を示し、さらに我々も見本を示さないと、道徳教育を定着させていくのは相当時間が掛かると思う。

教科書では、日本人のすばらしい歴史を描く歴史の教科書にも期待していたが、道徳の教科書に期待するところが大だと感じている。例えば日本の歴史を変えた人物だとか、すばらしい発見や業績を上げた研究者、成功したスポーツ選手、世界で活躍している人たち、あるいは、すばらしい行動をとった一般の人や紆余曲折の中でも人の役に立ち喜んでもらえる人生を手にした人など、そういった方の物語がそれぞれの教科書に出ている。私が期待した以上にすばらしいと感じながら読ませていただいた。

一つボリュームについて質問だが、大体 35 とか 36 ぐらいの話に分かれているのだが、ページ数は 120 ページから 180 ページぐらいと幅がある。ページ数が多いほうが、いろいろな文章を選択できるということもあるのかと思うが、ボリュームについては何か制限はあるのか。

各者の内容については、まず、地元のことを題材にしたものがどのくらいあるのか見てみた。震災のことは大体出ているが、そのほかの話題は少ない。もう少し地元の話が出ていると、より興味を持って読んでいただけたらと思った。例えば B 者の「咲いたよ、こうすけ君の朝顔」は、白血病になった子どもの話だが、これは震災とは別の宮城県の話だ。こういうのは、自分たちのまちの話ということで、興味深いと感じた。

C 者は 4 年生の No. 5「学校の自慢を大切に」は、下駄箱に靴が並んでいて、傘もそろえるという話だが、これはおそらく山口県の明倫館の話だと思う。あそこは子どもたちが靴をきれいにそろえている。非常にいじめが少ないという話も聞いている。基本的なことをきちっとやるということが、いじめを減らすことにも良い影響があるのではないかと感じた。基本的な挨拶からはじまり、靴をそろえる、心を込めて掃除するなど、そういうことが書いてある。

「靴をそろえると心もそろろう、心もそろろうと靴もそろろう」という言葉があるが、日常生活の中の基本的なことを抜かしてしまうと、子どもたち同士の心がそろわないということになる。その辺りで、C 者は良いなと感じた。

D 者は、これも震災に関係あるのだが、5 年生の 13 番目「命を守る防災訓練」。日頃からの訓練によって、亡くなった人がゼロだったという釜石の話だが、これも地元の話としてもいいと感じている。

E 者の 1 年生の No. 15「そろっているけど」は、これも山口県の明倫館の話ではないかと思う。

F 者も 1 年生の No. 18、これも明倫館の話ではないか。

H 者の 4 年生の No. 32「ふるさとに届け、希望の舞」は、羽生結弦君のスケートの練習場が被災し、日本全国で練習をして、地元が元気になるようなことをたくさんされたという話で、これもなかなかいいと感じた。

同じく H 者で、5 年生の No. 24「明日もまた生きていこう」は、バレーボールの話で、がんの宣告を受けた横山友美佳さんの話があった後に、「考えよう、

話し合おう」というものをやり、次にお友達の木村選手から「友美佳へ」という文章がある。同じ内容を取り上げたものはほかにもあるが、本人の話に加え、友人の話もあり、より心にしみるようにつくられていると感じた。

同じく6年生のNo. 13「365×14回分のありがとう」は、題名もおもしろいと思ったし、「娘から母へ」の文章の後に「考えよう、話し合おう」のところで、その後に「母から娘へ」の文章がある。物語を読み、一旦考えてから、さらに別な文章があるというところで、心の中に入っていきような内容になっている。同じ文章でも絵が違ったり、題名が違ったりすることによって、結構感じ方が違うなという印象を受けている。

教 育 長  
今 野 委 員

A者とG者についてのご感想はいかがか。

東日本大震災の件ではA者の4年生のNo. 33「コロと一緒に」は、これも非常に心にしみるような内容である。それから、3年生のNo. 32、これは女川の津波、「おじいちゃん、おばあちゃん、見ていてね」ということで生命の大切さを謳ったような内容で、これも地元のことである。

G者は、地元のことでないが、4年生のNo. 4「ヘレン・ケラー物語」で、「障害は不便だけ、不幸ではない」というのは、なかなか良いと感じた。

我々も昔、本で読んだりしたものがたくさん出ているが、日本人のすばらしさなどがたくさん書いてあり、全体的にも良いと感じた。

G者の1年のNo. 34「大好きだから」はアンパンマンの話が出てくるが、仙台はアンパンマンミュージアムもあり、1年生が親しみやすく、道徳をスタートするに当たっては良いと感じた。

教 育 長  
道徳担当指導主事  
教 育 長

ボリュームについてのご質問があったが、事務局でお答えいただけるか。

教科書のページ数については特に制限はない。

薄くても厚くてもよいということになっているということである。ばらつきが各者あっても構わないということになるのか。

教育指導課長

国の特別の教科道徳の教科書検定の報告というものがあるが、ページ数については特段の記載はない。ただ、学習指導要領に示す道徳科の教材の配慮事項には、教材の取り上げ方については、不適切にならないようにという記載がある。

教 育 長  
吉 田 委 員

次に、吉田委員。

今、今野委員がお話しになったように、6冊8者計48冊、どの教材を読んでも心が打たれて、そして心が耕される思いだ。これは私ばかりではないと思っている。非常に感銘的な教材で全て構成されていると受け止めた。仙台市の採択の観点が1から16まであるわけだが、このうち二つに絞って特長を話したい。

一つは、現在仙台市が置かれている状況から、いじめ、そして命ということである。二つ目は、先ほど指導主事から説明があったが、いわゆる「考え、議論する道徳」のための授業と教科書という観点である。

A者は、一つ目の観点から、いじめに関する特設コーナーが設けられており、子どもたちの意識化が図られると思っている。しかも、その内容は直接的な教材、間接的な教材という形で構成されている。さらに、生命の尊さということについてはすべての学年で、3教材で構成されており、充実していると思う。

二つ目の「考え、議論する道徳」の観点では、各教材のタイトルの前に主題にせまる小見出しがあり、学習の動機付けがなされているという印象を受けた。

さらに、各教材、道徳の時間でいう中心発問、そして道徳の実践化に結び付くような発展の発問というような二つの発問ですべて構成されているということが印象的だった。

B者は、いじめに関しては特設のコーナーはないが、関連内容項目という教材の学習の積み重ねでいじめに向き合う心を総合的に育てることができるような構成になっている。生命の尊さについてはすべて全学年3教材で構成されているという印象だ。

「考え、議論する道徳」では、教材タイトルの前に主題につなぐ小見出しがあり、学習への動機付けがなされる編集になっている。

別冊が付いているが、内容項目として見開き構成になっており、教材同士の関連付けにより、道徳的価値を印象付けている。そしてまた、子どもたちの心を深めるという構成になっていると受け止めた。

C者もいじめに関しては特設のコーナーはない。確かにいじめというくくりでは示されていないが、低、中、高と発達段階に応じた教材内容で構成されており、いじめをなくす態度を育てるような編集がなされているとの印象である。さらに、いじめ、命の尊さという関連教材については特別なマークが付けられており、子どもたちの印象を結びつけるような編集になっている。

「考え議論する道徳」の観点では、これも教材文の前に課題提起文というものがあり、学習への動機付けが十分になされるという印象を持った。各者によって「学習の手引き」とか、いろいろ名称があるので、「学習のガイド」というふうに統一して述べるが、その学習のガイドには三つから四つの設問、ときには七つの設問があり、ある一定の学習の見通しがつくような編集がなされているという印象を受けた。

D者は、いじめに関する問題がユニットという形で特設コーナーが設けられている。全学年とも2教材＋コラムで構成され、いじめに関する認識が持てるようになっている。生命の尊さについても全学年3教材で構成されている。

「考え議論する道徳」の観点だが、やはりこれも教材文の前に子どもたちに対する提案、課題の投げかけがなされ、学習への意識付けが図られる編集になっているという印象を受けている。学習のガイドでは二つから三つの観点で発問がなされており、さらに道徳的实践に結びつけるような発問もされている。

E者は、いじめにかかわる特設コーナーが設けられている。併せて心の云々ということで、直接教材と2教材で編成されており、かなり、子どもたちの意識をいじめのほうに向けることができるという印象である。

「考え議論する道徳」の観点では、これも教材の初めの部分に、主題に迫る一部の文を抜き出して、学習への動機付けを効果的に編集している。

学習のガイドと別冊のノートがあるのだが、学習のガイドのところで発問している内容がノートの中で位置付けられて、その関連性もしっかり結び付けているような編集内容だ。

F者は、特にいじめに関するような特設コーナーはないが、いじめという表記のある・なしにかかわらず、関連教材をしっかりと位置付けている。さらに、付録があり、1年生で六つ、2年生から6年生では五つの教材が用意されており、うち3教材がいじめに関係する教材かと思う。すべての内容項目、道徳的価値はい



じめに結び付くわけだが、特に一つ目の善悪の判断、自立、自由と責任、そして二つ目の親切、思いやり、三つ目の友情、信頼、四つ目の相互理解と寛容、そして最後に公平、公正、社会正義と、この内容項目はより直接的にいじめということに結び付くかと思う。

F者の付録の中の5から6の教材の中の三つがそのいずれかの内容項目に合うということから、入れ替えという作業により充実したいじめに関連した教科書になると印象付けられた。

「考え、議論する道徳」の観点だが、これも教材の冒頭に主題に関する問題意識を高める設問があり、授業に臨ませる意識を高められると思う。それから、A者、F者は既習漢字を中心に使っており、できるだけルビを少なくしている。ということは、子どもたちにとって読みやすい、親しみやすく、その内容の読み取りに余り時間を要さないということで効果的だと思う。

この発行者は最後の学習のガイドで、すべて二つの設問をしているのだが、下段のところに、そこに迫るための設問がいくつか用意されているのが特長だと思う。

G者は、いじめに関する特設のコーナーはないが、先ほど言った内容項目が一番多く取り上げられている発行者である。したがって、いじめに関する学習を充実させることができるとし、生命の尊さについてもコーナーを設けており、しかも3連続教材ということから、子どもたちの命に関する意識を高められるという印象を受けた。

「考え、議論する道徳」の観点だが、学習のガイドに、中心発問と発展させるための発問の二つで構成されているのが特長だろう。

最後にH者。いじめに関する特設コーナーはないが、人権、いじめ防止に関する教材を多数掲載していることや、生命の尊さについては各学年2ページの特設ページを設けているのが特長かと思う。

「考え、議論する道徳」の観点では、これも教材名の前に主題に結び付く言葉を明記しており、学習意欲や動機づけに結び付けようとしていることが印象的であった。

それから、「ノート」というものが付いていたが、ここの特長は設問について記入するだけでなく、フリーのスペースがあるというのが一つの特長かと受け止めた。

教 育 長  
齋 藤 委 員

次に、齋藤委員いかがか。

8者とも本当によく研究されて、子どもたちのために命の尊さや道徳の学ぶべきことを考えていると強く感じた。どの教材を読んでも涙を流さないものは一つもないというぐらい感銘を受けた。

A者は、最初に「なりたい自分」というものがあり、ここで自分へ問い掛けをする。そして、最後のところで学習の振り返りがあり、「もっともっと輝く自分になろう」との設問がある。

それから、付録と教材内にある「つながる、広がる」だが、こちらは他教科との関連や、日本の良さを示すなどしている。道徳では日本文化というところも伝えていってもらいたいと思っていたので、これはすばらしいと思った。

また、東日本大震災については、高田の一本松や気仙沼港のことなども取り上

げられていて、非常にボリュームがあると思った。

何をポイントとして見たかという、やはり生命の尊さ、いじめ、あとは子どもたちが教科となった道徳をどのように捉えられるかという3点で考えた。

A者のいじめのユニットにある「いじめのない世界へ」は、まず「とびらページ」で子どもたちに投げかけ、それから第1教材、第2教材と進んで、またもう1回「とびらページ」に戻って子どもたちに反復して確認をさせるというあたりが非常に良いと思った。

B者は、別冊になっていてボリュームがあるが、二つとも内容がとても濃い。読み物は、道徳内容を四つの視点に分けて構成している。それから、礼儀やマナー、人権や福祉教育など、重点的にポイントを置いているところもたくさんあった。「命の輝き」という単元で、全学年のコラムで取り上げているところもすばらしいと思った。

C者は、まず、「家の人から一言」という欄があることが非常によいと思った。道徳は子どもたちが先生とだけ学ぶものではなくて、家庭教育で家族と一緒に話して合っていたらいいと感じている。命の尊さにしても、いじめの観点についても、家の人と話合おうということが非常に大切なのではないかと思う。

そのあたりは、単元の最後に「学びの手引き」で子どもたちが作業を行いやすくなっていることや、「ジャンプ」という点では演じてみて自分がどのような気持ちになるかというあたりを考えてくれていると感じた。「学びの手引き」は、指導者としても使いやすいのではないかと感じる。導入、学びの手引きというあたりが良くつながっていると感じる。

D者は、まず開いて、「みんな生きてる、みんな生きてる」というフレーズから始まり、子どもたちに生命の尊さを知らせていくということで、すばらしいと思った。また、絵が非常に優しい色遣いだと思う。

それから、3年から6年の付録でも、日本の文化や伝統の伝え方もきちんと伝えている。

最終ページに他教科との関わりというものがある。「教科」とはっきり打ち出しているのは、8者の中でもD者ともう1者かと思う。

いじめについてだが、1年生で「こんなことしてない？」ということから始まり、2年生の「嫌な気持ちかもしれないよ」、そして、3年から6年に対しては「いじめを許さない心」と、子どもの成長に合わせて意地悪とかいじめとかいじりとかを見つめていっている点が流れ的に分かりやすいと感じた。

E者は、別冊のノートがあり、四つ観点が非常に分かりやすくなっていると感じた。これは学習指導要領の四つの観点到に沿って見やすい。

やはり「学習の手引き」で「演じてみる」というところがあるが、E者もアクティブラーニングをもとに話をしていると感じた。

もう一度、最初の見開きの部分だが、こちらの「道徳のとびら」は1年から6年まで共通してあるのだが、自分はひとりで生きているものではない、いろいろな人たちと関わって自分は生かされているということが図解されているのが非常に分かりやすいと感じた。

F者は、文章の下段で考えを投げ掛け、単元の流れを導いている。ことわざや論語等が紹介されているあたりは、ほかの7者には見られず、非常に考慮されて

いると思った。

生きるということに対しては「命を輝かせて生きる」というあたりで、命のメッセージを強く述べてくれている。

G者は、文字の大きさや文章のボリュームが特長か。こちらも「やってみよう」ということで演じてみたり、手話の体験をしたり、「深めよう」では「どうしてかな」ということをみんなで話し合う。そして、「広げよう」では資料として偉人のことや個人情報とは一体何だろうかというあたりも捉えている。1年生の「つなげよう」では、「自分に賞状を書こう」と、子どもたちが自分を見つめて書く欄があって良い。「お家の人から」という欄もあることも大切だと思った。

最終ページで、G者も他教科との関連を分かりやすく書いている。

H者もやはり1、2年は「考えよう、話し合おう」で、3年から6年は「学習の道すじ」でまず考え方を示して、単元に入って行く。そして、「学習を広げる」という中ではいろいろと本の紹介があったり、定形外郵便とはどういうものかということが書いてあったりと、内容に広がりを感じる。

こちらも道徳のノートがあるが、本冊の右下に、別冊ノートには本冊の教材ナンバーが振られていて、関連性をきちんとつなげている。

教 育 長  
加 藤 委 員

次に、加藤委員。

授業としての道徳科の重要なところは、自分のことのようにそのことをしっかり考える、そこに入り込むということ、この素材やレイアウトや編集によって子どもたちが注意を向け、動機を高め、そこに入り込むことがうまく導かれているかということがとても重要な点かと思う。

そして、例えば授業の中でロールプレイなどをするに当たって、先ほどの自分の気持ちや考えを言葉にしていく、また、他者のものを聞いて、それをまた振り返って深めていくということに使っていける素材であるということだと考えた。

道徳教育が目指すのは、知識を身に付けるということではなく、人格的な成長、一番目に見えない難しい部分にどのぐらい貢献していくのかという点で、どの教科書も本当によく工夫されていると思った。

多くの領域があり、多くの素材があるわけだが、子どもたちが、初めての教科書の教科書を見て、これは何をやる教科なのか、どのようにやるのか、どうなると良いのか、そしてこの「どうなると良いのか」には特に答えがあったり、知識を身に付けたりという意味ではないというところをどのように導入していくのかということが大切だと思う。今回、見せて頂いた教科書には、その学びの道筋が非常に明確に書かれているものもたくさんあり、本当に良く工夫されているとの感想を持った。

A者は、自分自身のこと、人とのかかわり、社会とのかかわり、そして命、自然、気高いものという四つの大きな領域にまとめている、まず何をやるのか、ということが大きく目に入ってくるようになっていく。そして、「気づく」「考える」「話し合う」「振り返る」「見つめる」そして「生かす」と、どうやるのかが児童にも明確で分かりやすく示されていると思う。また、「話し合いの約束」がまとめられているというところも工夫点だと思った。

これに加えて、その後「なりたい自分」というものを最初にイメージさせるということによって、どうなったらこの授業を自分が一生懸命やったということに

なるのかというようなことが、2年生以降のすべてのテキストであらかじめ示されていて、理解しやすいと思った。

どの学年でも素材群が「いじめのない世界へ」と特に焦点付けられ、重点化されているということが児童にも伝わるような形で扱われている。今回、全者の教科書を見て、発問や問いがとても重要だと思ったところだ。

A者は1、2年では素材群の最初に目当てになる問いが一つで、教師の自由度が高い。素材群に十分に自分を投入して考えさせることについて、教師の独自の工夫ができることになるかと思った。

3年以降は素材群に関する問いが一つと、自分に引き寄せて自分だったらということを考える問いが一つ。授業進行の中心発問がしっかり押さえられているので、その他の進行は先ほど申し上げたように、クラスとか児童に合わせて教師の自由度、また教師の裁量が生かされる場所かと思う。

一方で、「問題を見つけて考える」という単元があり、考えるステップが提供されているというところでは、問いが段階的に出されていくところがあり、児童は考えを深めていく方法をこれによって知ることができる。問題解決的な方法を焦点的に取り入れて、すべての単元にこの形式をとっているわけではないというところが、方法を提示しつつ学習活動には自由度を持たせるという意味で、児童の個人差にも対応し得ると思った。

B者は、最初に素材の領域、それから簡単なめあてというかキーノート、そして教材のタイトル、そしてノートのページ数が囲みできちんとまとめられており、児童がこれを見てどのように進めていくのかが一目瞭然で、大変親切で動機付けが高いと思う。学習の道筋が分かりやすい。

高学年であっても挿絵が入って見開き4ページほどにコンパクトにまとめられている素材文なので、分量的にも大変扱いやすいと思った。内容的にもいじめの問題に熱心に取り組んだ内容となっていたと思う。

問いのところは、ノートとつながってコメントするようになっているが、読みものと活動の2分冊となっているところ、さらに問いが読みもののほうには書かれていないということもまた大きな特長だ。ノートのほうに問いが書かれているということは、設定された問いに左右されず、児童が個人個人で読みものを自由に読み込むことが可能になるという意味合いもあり、使いやすい。そういう意味で展開しやすいのではないかと思った。

C者は、「今の自分について書きましよう」というところが大変細かく、好きな動物、好きな季節、好きな食べ物、大切なもの、将来の夢、非常に多角的に現在の自分について意識をまず向けることができる。そして、最後の1年間の道徳の学習振り返りの欄と対応して、先ほど言った「どうなったらこの授業を一生懸命やったことになるか」というところと整合性のあるつくりになっていると思う。

素材文は文の量は適切で、心情が伝わりやすいような記述に心掛けられているように感じられた。命の尊重、みんなと仲良くする、情報モラルとスキルに関するテーマが各学年に無理なく組み込まれている。単元ごとに目当てが過不足なくコンパクトに示されていて、導入に適しているのではないかと思った。スキル「やってみよう」の内容、場面も日常生活によく生じる大事なスキルを取り上げていて、クラスでロールプレイを実施して互いに確かめ合うのに有効な素材ではない

かと感じた。

問いは少し多めだが、特に教材理解のため、つまり自分を没入させる、そこに十分に入り込むための設問が多くなっていることを考えると、児童が十分に入り込むことを重視し、そこを十分やっていこうという意気込みなのかと感じている。

D者は、基本的なアプローチ、つまり、どうやっていくのかということが、「話し合ってみよう」「読んで考えよう」「演じて考えよう」「書いて考えよう」「書いたことを毎日の生活の中に生かしていこう」と、児童に分かりやすい言葉で示されていると思う。

素材文についても量は適切で、情報モラル、いじめ、人権も各学年にバランスよく取り込まれていると思った。いじめという言葉での表現が1年生から通して明記されている。また、3年生ではユニバーサルデザインという言葉、5年生では差別という言葉の表現も用いられていて、いずれも強く真っ直ぐなメッセージとして伝えられていると思った。

問いも適切で、最初にその教材のめあてが簡潔に提示され、最後に素材についての二つの問い、そして、あなた自身についての問いが1個で、そして「つなげよう」というシンプルな働き掛けを並べているというあたりも大変効果的ではないかと思った。

本冊の中に学びの記録というものがあり、それも授業の中で取り入れて使っていくところが重要だと思う。自分自身の学びの記録を一覧できるということは大変重要なことで、児童にとっても個々の授業が自分の中にどう積み重なっていくのかということを確認できる機会として、それ自体が学びとなると思った。

E者は、内容の領域、カテゴリーとしては自分、周りの人、みんな、生命、自然というものを図で提示している。こういった「何を」ということと「どのように」というところが、ここでは「気づく」「考える」「深める」「見つめる」「生かす」「話し合ってみよう」「動いてみよう」「書いてみよう」ということで、その領域の示し方と同時に、どのようにアプローチするのも分かりやすく書いてある。

素材文も命、人権、いじめ、情報など、「心のベンチ」という独特の表現によって、子どもたちの心の中に「ちょっと座ってゆっくり考えよう」というような場所をつくってコンパクトに提示している。文の量も大変適切だと思った。

E者は特にいじめを扱った単元が非常に印象に残った。これは日常的な場面に起こるいじめエピソードをよくそしゃくして題材化していると思う。例えば3年生では一般的ないじめの定義と立場の違い、4年生では「遠足の朝」とか「なくそう、いじめ」、「いじりといじめ」というようなタイトルで、いじめのメカニズムを学年に無理なく、発達に無理なく提起をしていると思う。5年生では傍観者、つまり横で見ている人の問題、傍観者効果、6年生では法律との関係、認知的な枠組みの変化、嫌いな人との付き合い方など、いじめというものを良いか悪いかという二分法で単純に示していくのではなく、日常的な現実場面で起こり得る葛藤状態というものを取り上げて、よくそしゃくして再現している。印象的な素材が多かったと思う。

問いについては、最初に導入の問い、最後に「考えてみよう」ということで、

授業の中核的な中心発問が一つ、そして「見つめよう」「生かそう」の問い一つ、計三つになる。この問いのセットが大変簡潔で明快で、これも好ましいものだった。

やや大きな枠組みでの問いというものもある。例えば小学校2年生では「生き物を観察したり、生き物について話をしたりしたことはあるかな」、小5では、例えば「心のこもった挨拶ってどんな挨拶か考えてみよう」など。ただ、逆に道徳科の問いというのは必ずしも具体的で答えやすいものが求められているわけではないので、その問いに教師の添える質問、つまり、この問いを使ってどういう発問を教師が加えていくかということが生かせるということでもある。目の前の児童の反応に合わせて働き掛ける部分を大事にできると思った。

ノートにチェックリストがあり、しっかり考えたか、新しく気付いたことがあったか、これから大切にしたいことが分かったかという、非常にシンプルであるにもかかわらず、この道徳科の授業の中で大事にしたい「考える」「気づく」「理解」といったことが、子どもたちに分かりやすい最終的なセルフチェックになっている。このチェックを繰り返していくこと自体が次の素材への取り組み方を伝えることにもなるので、大変有効ではないかと感じた。

F者も基本的なアプローチ、方法を分かりやすく丁寧に提示している。問いをもつ、考える、話し合う、まとめる、やってみるということである。そして、領域の内容も何をやるかがきちんと示されている。

授業だけでなく、さまざまな場面での生かし方のイメージ図、例えば学校では、家庭では、地域ではということも加えられていた。これによって児童自身に分かりやすいように学習の目的と目標が示されて、本の使い方、枠組みも示されている。また、授業の中でそのときやっていることを意識付けるために、先生が「もう一度ここを見てみよう」という使い方もできるようになっていると思った。

そして、「あなたはどんな人になりたいですか」というような問いにつながっていくので、児童が無理なく入っていけると思う。

F者の特長で印象的だったのは、素材文の途中にも問いが用意されていることだった。今で言えば「つぶやき」的なこととして、例えばいじめのところでは最初に問いがあって「どうして起きるのでしょうか。よい友達はどのような友達だと思いますか」という大きな質問はあるのだが、途中で細かな問いやテキスト側の感想のようなものが下に添えられている。このつぶやき的なことがあることで、児童にはどんな感想でも心に浮かんだものを表現して良いということが喚起され、いわゆる望ましい答えは一つではないというようなメッセージが伝わり、児童にとってこの発問が身近に感じられるかもしれないと思った。

G者は、使う側の視点からよく工夫されていると思った。特に方法として、アプローチとして「みんなの考えをよく聞いて自分の考えをもっと膨らませよう」というものの次に、「話している人のほうを向いて聞こう」「手をしっかり挙げよう」といったそこでの細かな注意点、態度、姿勢みたいなものが加わっている。次も「少ない人数で話し合ってみましょう」という話し合いのところに、「しっかり聞いて聞こう」「友達の目を見て話そう」というような注意点、「自分の意見を表現してみよう」のところでは、「登場人物になり切って考えてみよう」「役を演じている人を見ながら自分の考えを見つけよう」とか、そういった細かな注

意点が加えられている。

これらは実際に話し合いを進めるときの心構え、マナーだと思う。アクティブラーニングという言葉が非常に今進んでいるが、そのときの基本的な注意事項、約束事項、マナーでもあり、実は大変重要な部分だと感じた。こういったことが添えられていることが大事だと思った。

そのほかに領域ごとに目次があるのだが、これがページ順ではない形でもう一度まとめられている。これは同じ領域のものがどのようにまとまっているかということが見られるので、児童自身が1年間の内容を領域のほうからあらかじめ概観したり、進行に合わせてもう一度概観したりというようなことができ、ここも工夫点だと思った。

また、「やってみよう」「つなげよう」「広げよう」「深めよう」の展開の道筋も用意されている。

素材文の分量も適切で、全体が見やすく、子どもたちが注意を向けやすいレイアウトがなされていると思った。

テーマの領域も、「私のこと」「あなたと私」「社会と私」「命や自然と私」という児童に分かりやすい言葉で言い換えられており、教科書の中でも児童自身が一目で分かるように単元のタイトルの下に添えられている。その日の授業で取り上げる素材がどのカテゴリーなのか、児童自身が把握しやすくなっている。「私」から始まり、「私」を取り巻くさまざまな関係性への意識を高めて、具体的に想定するための道筋が分かりやすくなっている。

いじめを正面から言葉にして取り扱っている、そのいじめという表立ったメッセージは少ないが、命の教育が大きな位置を占めていて、内容的にはいじめについてもしっかり扱っていると思った。

問いについては簡潔でコンパクトな二つの問い、「考え」と「気持ちを聞く」というところがある。これも教師の自由度が高いので、活用の仕方が任されており、クラスの児童や児童の構成に合わせて自由度も高めていけると思った。

H者は、最後に領域ごとに素材をまとめる工夫が見られていて、G者がやっていたように目次のページ数を離れて、領域ごとにどの素材がまとまるのかが分かるように工夫されている。基本的なアプローチも言葉できちんと書かれていた。そういったことを先生方が踏まえて子どもたちに伝えていくと良いと思った。

素材については、ここも「いじめ」と文字では余りはっきりと書かれているものではないが、状況理解、心情理解を促すために配慮された素材文がたくさんあり、感じ方や気持ちを大事に取り上げようとする問いの組み合わせ方が印象に残った。

この問いだが、問いの後に「学習を広げる」があり、本の紹介や「活動しよう」「もっと考えよう」があり、関心を持った子どもたちがさらに自ら学ぶことができる展開の道筋も用意されていると思う。

ノートもつくられており、ノートは内容項目に対応してまとめられている順序だったので、授業の進行に合わせて先生が指示をして該当するページを開かせる必要はあるが、ノートにまとめる作業によって、テキストの順序ではなく、以前取り組んだ同じ内容項目の授業とのつながりを児童自身が意識することができる。そして1年間の授業の蓄積を自分で確認する効果があるのではないかと思った。

それでは、中村委員。

道徳が教科になったことで、実生活に自分のこととして反映できるようになってもらいたいというのが願いの一つである。ただ勉強して終わるのではなく、自分の友達、家族、地域などにそういった気持ちをきちんと持って接することができるようになってもらいたいと思いながら読んだ。そういった点では、どこの本もよく練られ、考えられ、本当に感動できるような本だと思う。

A者は、例えば「出会う」「ふれ合う」「つながる 広がる」「問題を見つけ考える」ということが最初にあり、子どもたちがこれから何をやるのかということがよく分かるような表示になっている。また、1年間の計画が出ていて、先生だけでなく、子どもたちも先の見通しを立てられるところも一つの工夫かと思った。

また、最初に「なりたい自分」というものをイメージさせ、最終的にそのイメージに持っていこうということ投げかけられるというのはいいところだ。

一つの教材の最後に考えさせる発問が、本編の内容と自分自身についての二つとなっており、考えを内容から自分自身のほうへ広げていくことができるものだと思う。

巻末の資料は写真がとても美しく、日本の伝統文化を知識として取り入れられる工夫がなされている。

B者は、「読みもの」と「活動」というノートに分かれているのが特長だと思った。自分の考えを持ちやすい発問がなされていると思う。いじめや防災が各学年に配置されていることで、1年から6年まで通して考えていくことができると思う。読みものの途中にも、活動のノートの途中にもコラムがあり、関連のある考えを広げられる内容になっている。

C者だが、いじめや生命の尊さや情報モラルなどについてよく考えられていると思った。大判でとても見やすく、写真なども美しく目を引いた。「学びの手引き」の発問が多くあり、より細かく、より深く考えることができるようになっている。そして、「ジャンプ」につなげていくことでより子どもたちが深く考え、学べるような形になっていると思う。

キャラクターに統一性があり、親しみを感じるような形で、子どもたちもそういったところも目にするのではないかと思う。

D者は、一つの教材の最後に、本編の内容と自分自身ということでの発問があり、考えを自分自身に落とし込んで広げていけるという形である。発問の数などもちょうど良い感じがした。45分の時間内に自分の考えを一つ深くして、自分の中にすっと落とし込めるような形に持っていけるものではないかと思う。

いじめはユニットの形で、よく考えられる形になっており、6年間を通して重点を置いているという感じがとてもする。

こちら巻末の資料は伝統や文化が分かり、写真も見やすい、そして、他の教科との関わりがあるというところもしっかりと出ているので、指導する先生方もそういったところにもつなげていけるのではないかと思った。

1年生から6年生まで子どもの成長が分かるような形の表紙になっていて、それはほかとは違うような形だったので、目を引くところではあった。

E者もノートがついていることが特長になっていると思う。本編のガイドがノ



ートにつながっており、考えをまとめやすい。そして、現実の教室でありそうないじめ問題を取り扱い、重点を置いているというのがとてもよく分かった。

加藤委員もおっしゃった「心のベンチ」という言葉は、私もとても良いと思った。子どもたちにもこういったところをしっかりと踏まえて読んでもらえたらいいと思っている。

付録もしっかりとした一つの教材になっていて、多方面から課題を取り入れる工夫がなされていると思った。

F者は、ノートのとりが最初に出ている。ノートがあるわけではなく、ノートを自分でこういった形で書くと分かりやすいよというような例が出ている。先生のほうで「例えばほかの教科でもこういったことをこんなふうに」というふうに広げていくこともできるのではないかと見ていた。

コラムを入れ、関連知識が得られることが良い点かと思う。

本は大きく見やすく、付録もやはり一つの教材となっていて、しっかりしたものになっている。色調がとても柔らかく優しい感じで、道徳という教科に良く合うと思った。

G者は、大判で子どもたちがとても見やすい形になっている。発問も本編の内容に関するものと自分の考えを出すもので良いと思う。

そして、「やってみよう」「深めよう」「広げよう」などがあり、「やってみよう」などは自らやれることが書いてあり、それをみんな仲間で一緒にやって利用し、考えさせる工夫がある。そして、それは楽しく学べるところにまで落とし込まれているところがとても良いところではないかと思った。

他の教科との関連もあり、指導はしやすいのではないかと思う。

いじめ防止のところは、とても重要視しているということがよく分かった。

H者もノートがあり、考えがまとめやすい形になっている。色別になっていて子どもたちにも見やすい。いじめ防止や生命の尊さ、思いやりについても深く考える形につながっていているのがよく分かったし、巻末にそれぞれの学年に合った内容で、一つの教材ではなく大きく道徳として学べるような工夫があったので、それについてはほかではないような工夫がなされていると思った。

教 育 長  
花 輪 委 員

花輪委員は、いかがか。

まず総評だが、全体として道徳の教科書として非常にすばらしいものができていると思う。今野委員が指摘されたように、扱う題材のテーマは3分の1から2分の1はほぼ同じかと思った。ただ、詳しく見ると同じ教材でも各者かなり工夫を凝らしている。表現を変える、あるいは省略する、それから打ち切るところをどこにするというのがかなり違い、同じ題材でも各者工夫して教材として取り入れているということがある。

また、児童の興味が湧くようなイラストあるいは写真、デザイン、それから発問等があり、各者ともとても工夫されている。

自分を見つめ、相手を考え、みんなと過ごす、それから自然や生き物という四つの領域、さらにそれを地域、世界、それから歴史的に過去から現在にわたっていろいろな多様な取り上げ方がされている。

いじめ問題、それからインターネット、スマホ、情報の共有の問題も適切に取り上げていると感じた。

各者の教科書の特長を見ていきたい。吉田委員の2番目のポイントの考える発問の内容、加藤委員のあらかじめアプローチの仕方がどうなのか等々、かなり重複することをあらかじめ申し上げておく。

まず、児童が教科書を読んで自学自習できるか、あるいは家の人と議論できるのか、それから、先生の工夫というのは当然あるべきだが、最低限この教材でどこまで到達するのか、そのところを重要視したいという観点で見てみた。小学校6年の教科書を比べてみたが、各者とも1年から6年まで非常に安定した内容であった。

A者は、35の教材のほかに「出会う」「ふれ合う」「つながる」等の題材のコラムが平均的に七つあり、その上で各学年の最初のころに学びのやり方のガイドが書いてある。「気づく」「考える 話し合う」それから「ふり返る 見つめる」「生かす」等々、4段階で示されており、各教材に対する学びのガイドも末尾に2項目の問題提起、「どうしてでしょう」というものがあり、児童が自分で考えることが示されている。ところどころに考えるステップとして、順序よく自分の考えを深めていくような工夫がなされていると考える。

教材としてはかなり他者と違って独自の教材が多いのではないかという気がした。また、先生の工夫のしがいのあるようなテキストになっているとも思う。

B者はノートがある。題材は35の教材に読み物、コラムとして六つある。ノートは既にご指摘があるが、先ほど言った四つの領域順に並んでおり、各領域の最後には全体としてどういうことを自分が考えたのか等々がわかるような工夫がなされていると思う。

学習の進め方のところだが、最初に問題設定から始まり、どういうふうにか考えるか。まとめられているわけではないが、考えるフローチャートのようなものが書いてある。

テキストは「読みもの」であると割り切っており、発問等がノートのほうで問題提起をしている。分冊になっているが、そのコンセプトが非常に明快であると思う。そういった意味で、先生方の工夫のしがいがあるような教材だと思う。

C者は、学習の進め方が教科書の最初にあるわけではない。各教材の末尾に学びの手引きとして、ほかの教科書よりもかなり多い、一つから多いところで五つ、六つぐらいあったと思うのだが、非常に多項目の発問があり、順を追って考えさせるような工夫がなされている。

さらに、ところどころで「ジャンプ」と称して、そこでも児童自らが考えるような工夫がなされている。

D者は、35の教材のほかに付録、コラム、合わせて10の補助教材が掲げられている。最初にアプローチが書いてあり、「話し合って考えましょう」「読んで考えましょう」「演じて考えましょう」「動いて考えましょう」ということで、自分自身で考えることをとても重視している構成になっている。

各教材の末尾には「考えよう」として複数項目の発問、それから「つなげよう」ということで、特に本の紹介がこの教材はある。これはとても良いと思う。

教材の並べ方だが、D者は4月から5月、6月から7月と、季節の変わりまでよく考えて配列されていると思った。

E者は、ノートがある。合わせると225ページになり、かなり分量は多いと思っ

た。また、ノートは教科書の順番になっており、先ほどのB者の考え方とは少し違うような並べ方である。付録も五つ。それから、「心のベンチ」も六つある。この「心のベンチ」というのはすでに何度もご指摘があったように非常にいい内容になっていると思う。

学習の進め方だが、これは他者と違って「気づく」「考えを深める」「見つめる」という三つの考える動きを、話し合っ、動いて、書いてと、はっきり行動に表して考える観点を指示するようなやり方である。ここは非常に特長的だと思う。

各教材の末尾には「考えてみよう」と「見つめよう」、あるいは「見つめよう」「生かそう」、これが一つずつすべて提示されている。ノートのほうにも項目が多くあり、非常に深く考えられるような工夫がなされている。

ある教材の後ろに付録等があり、さらに掘り下げるような配置になっていると思う。児童が自学自習できて、さらに深く考えるような配慮がなされている。

F者も35の教材のほかに付録、コラム等がある。最初のほうにこれもアプローチの仕方があり、5段階で道徳の学習を進めようというような構成になっている。

さらに発問だが、末尾に2項目「まとめましょう」と「考えましょう」というものがあり、さらにこれも既に指摘があるが、下段に疑問点、例えば「どんな気持ちだったかな」というものがあり、読みながらところどころで考えさせるような工夫がなされていると思う。

特に1年から6年まで非常に同じような姿勢、考え方で、安定して教科書が作られているという印象を持った。

G者は非常に大判であり、子どもたちに対してフレンドリーで読みやすくなっている。35の教材のほかに12の付録、コラムがある。「深めよう」「やってみよう」などの項目があるが、これが一番多かったと思う。

アプローチの仕方も「考えよう」「話し合おう」「学んだことをまとめましょう」というようなガイドがあった。

各教材の末尾には「考えよう」として2項目挙げられているが、これは教師の工夫を期待している形の教科書だと思う。

それから、正解のない問い、これはほかの教科書でもあるが、そういう問いがあり、広い考え方を導いている、意図的にそうしているのではないかということで好感が持てた。

H者は、ノートがある。このノートはB者と同じように領域別に分かれており、これは色別になっているのだが、最終的にはその領域のことをまとめて振り返ることができるような工夫がなされている。教材は35の教材に四つの付録である。

学習の進め方だが、教科書の最初に自分で感じ考えたことを云々と、最後には「ノートに書きましょう」ということで非常に細かく指示されている。末尾には「考えよう」「話し合おう」という一つないし五つの問い掛けがなされており、ノートにも同じような問い掛けの発問がなされている。

教材のところどころに本の紹介があるというのは非常に好感が持てた。

教 育 長

委員の皆様から8者の見本本について、一通り丁寧にご意見をいただいた。者それぞれに特長もあり、工夫もなされているということが皆さんのご意見でかなり分かったかと思う。

(休憩 午後 3 時 52 分～午後 4 時 5 分)

教 育 長 一通りご意見をいただいたところで、次に、各委員におかれて推薦したいと思う教科書について 2 者ないし 3 者を、順位は付けなくて結構だが、理由も簡潔に述べていただきながら挙げていただきたい。それをまた一通りお聞きした上で次の議論に進めてまいりたい。

今 野 委 員 感動的なものが良いだろうと思い、それぞれ丸をつけながら点数化していた。おそらく読む順番でもかなり影響するかとも思うのだが、今、皆様方の話を伺ったのと私が点数をつけたものから言うと、順不同で、E 者、H 者、G 者となる。

教 育 長 今の話では感動的な部分で自分なりに点数化して、その 3 者ということである。

吉 田 委 員 前にも話したとおり二つの観点で考えてみた。一つ目は、今の仙台市の置かれている状況では、いじめと命ということがある。本来ならば「いじめ」という言葉を出さず、関連教材で人権とか人間との関わりを子どもたちに学ばせたいのだが、今の状況を考えるとやはり子どもたちに「いじめ」についてしっかりと認識させなければならないと考えた。

いじめに関する特設コーナーを設けているのは A 者、D 者、E 者。特設コーナーは設けていないが、いじめについて内容項目でかなり多く取り上げ、命について特設しているのが G 者だ。

二つ目は、「考え、議論する道徳」ということであるが、授業には達成目標というものがある。そして、それに向かう児童の実態がある。児童の実態を達成目標にまで上げるのに介入するのが教師である。

教師というのは児童の実態を十分に踏まえながら課題に向かわせる、アプローチさせる。その実態を踏まえるというのは、道徳でいえば子どもたちの生活の状況である。これは学級によって異なるので、当然、子どもたちに問い掛ける発問も変えていかなければならない。

中心的発問は教科書に掲載されていたとしても、余りにいろいろな発問が準備されると非常にマニュアル化してしまい、どこに行っても画一的な授業内容になる危険性がある。やはり学級の実態に応じた授業構成、授業づくりということを前提にしたことを考えていかなければならない。

ノートについては、一般的によく板書を写すとか授業が終わった後に自分の考えをまとめるとかというように使われやすいのだが、考える、議論するというようなことを考えると、自分の考えを発表するために簡単に自分のものをメモする、友達が発表したことについてそのキーワードを簡単にメモする、いわゆる結果だけでなく過程でも使えるノートということを考えていかなければならない。そう考えると、ノートはやはりフリースペースの多いものが良いのではないかと考えた。

それらのことから、二つ目の観点として推薦したいのは A 者、D 者、G 者で、また、分冊があり、問いかける発問が少ない B 者も考えてみた。

二つの観点を合わせると、推薦したい教科書は A 者、D 者、G 者の三つと考えている。

齋 藤 委 員 私も皆様方のご意見を聞き、また、自分自身でどうしてもこれをとっていた

のは、A者、D者、C者だ。G者も非常におもしろい観点があり推薦したいと思った。

指導者がいかにして子どもたちと一緒に道徳の時間を過ごすかということ、それから、子どもたちが教材をもらって単元で話し合っていくときに、簡単に教科書の中に書き込める欄があるということが大事なのではないかと思った。その場で子どもたちが書き、学期の終わりなどに先生方のほうでノートを集め、そこで子どもたちの成長を見ていただくということで、やはり子どもにはとにかくその単元で話し合っているときに、ぱっとメモができるような状態のものを選びたいと思った。

それから、いじめの観点、命の観点を併せ持つというところで、A者、D者、C者を推したいと思う。

加藤委員 吉田委員と重なるが、やはり短い授業時間の中で余り詰め込まれても子どもたちの豊かな展開にはならないだろうと思う。緩やかであるぐらいのところで、しっかり考えたり、その文脈に没入したりという時間を大事にしなければならない。そうすると、自ずと扱える素材の量とか問いの発問の数などは限られてくるだろうと思う。

また、子どもたちの注意と集中の問題を考えたときに、先生が毎回「こっち見て」「あっち見て」というようなことになると集中も途切れてしまうので、できれば一つのところにぐっと集中を持っていけるテキストに出会ってほしいという感想がある。

教科書を教えるのではなくて教科書で教えていくとは、昔から言われていることであり、どの授業でもそうだと思うが、特に決まった答えを一つ求めるのではないような科目については、先生方の自由度がある程度あるということ、子どもたちが無理なくその時間内で一つのことを集中してやれるということが大切だと考えた。

ある一定の道筋、学びの道筋が子どもたちに提供されていて、また、先生たちがそこに戻って説明をしやすいということも重要なことかと思う。素材の内容と質、発問の質などトータルで見て、私はA者、G者を推薦したい。そこにいじめを特に挑戦的に取り上げてくれたということでE者を加えて、3者である。

中村委員 私は仙台ということの地域性や、いじめについて特化したというところを一つの選択の基準にしたいと思っていた。それから、やはり授業時間との関係で、小学校はそんなに長くはなく、子どもたちの集中も途切れないようにということで、やはりあちこち見るのではなく、教科書の本編の中で終えられるような、余り詰め込まない形がいいというのがもう一つである。そういったところから、A者、D者、F者である。

花輪委員 どう学べるのかという点で、児童に分かりやすいこと、それから、先生方もある程度の工夫ができるものというところを見た。道筋が立てられ過ぎているのではなく、先生方にある程度のフリーハンドがあるほうがいい。

それから、一つの項目をその授業時間だけではなくて、児童自身が自学自習したり、あるいは家庭でそういうことを話題にしたりというときに、ある程度材料があったほうがいいのではないかと考えて、付録、コラムあるいは本の紹介等々があったほうがいいのではないかと考えた。

さらに皆さんがご指摘のいじめの問題をどう取り扱うかということも踏まえ、D者、E者の二つを推薦したい。

教 育 長 皆さんの意見をまとめてみたいと思うが、花輪委員、ほかの委員が3者挙げられているので、集計上、後で公平性を欠かないように、もう一つ上げるとしたらどこの者か。

花 輪 委 員 A者を。

教 育 長 A者が5人。B者は結果的にいなかった。C者が1人。D者が4人。E者が3人。F者が1人。G者が3人。H者が1人となる。

議論として2者で切るか、4者で切るか。2者だとA者、D者で議論を深めていきたいと思うが、E者、G者がそれぞれお三方いる。一応この四つまでまずもう1回入れて、その中で議論することによってよろしいか。ちょうど8者のうち半分という形になろうかと思う。まずはこのA、D、E、Gの4者の中でさらにいろいろな視点でまた議論をしたい。

宮城県からの別冊資料や教科用図書の協議会の報告では、命の大切さやいじめの防止など、皆さんの意見とほぼ同様に書かれているかと思うが、そういう視点や、さらに仙台市の採択の観点というポイントも踏まえられたい。資料4の仙台市の採択の観点では(11)以降(14)(15)というところに思考力、判断力、表現力、また自主的・自発的な学習、言語活動の充実、さらに自己を見つめて物事を多面的・多角的に考えを深める学習、そして主体的な学習ということが述べられている。そういう視点でさらにこの4者の中から絞り込んでいきたいと思う。

この点についてご意見等あるか。花輪委員、そういう点でさらにその中で花輪委員としては今のような考える学習というか、児童の基本的に身に付けるという視点からすると何かご意見等あれば。

花 輪 委 員 ノートの存在の位置づけにとっても迷った。当初2者を挙げたのは、ノートのある中で一番これがいいということでE者を、ノートがないところで一番いいということでD者を挙げた。ノートを教科書の中に入れるか、別冊にして外出しするかで形態的に非常に大きく違うということがある。教科書とノートと2冊持っていくか、自前のノートも合わせて3冊持っていくのか、そこでも迷った。もう1点は、ノートの中にもコラムとかいろいろな読み物があり、それがもともとの教材との一体感、逆に言うと独立感というものがあり、そこをどう考えたらいいかと迷いつつ、両方から1冊ずつ選ばせていただいた。しかし、いろいろご意見を聞くと、確かにこれもあれもということで教材が多い、さらには設問が多いというものも、少し児童にとってはきついのかという感じもする。今、残っている4者の中で唯一ノートがあるのはE者だが、その辺が考えどころかと思う。

教 育 長 ノートの「ある」「なし」で、良いとか、悪いとかとなるわけではない。どちらもそれぞれの良い面がある。何かノートの存在ということでご意見はあるか。

吉 田 委 員 先日、錦ヶ丘小学校の自主公開があった。授業公開なので主にワークシートのなものを利用しての授業だったが、その中にシンキングツールという、その研究に関わった大学の先生が開発した独自のペーパーがあった。子どもたちの様子を見てみると、かなり書き込めているようだった。

背景には、ノート展示場という取り組みがあり、1年生から6年生まで全くフリーのノートにいろいろなことをどんどん書いている。形式にこだわらず、書く

ことによって考える力を伸ばそうというのが意図するところだったと思う。

ワークシート的なものだと、確かに教師から離れて自主学習はできると思う。しかし、道徳の授業というものは子どもたちのさまざまな実態があり、それらをもとにして構築していく、つくり上げていくという、教師裁量のところもある。そういうことがあれば、ノートに拘束されることなく、先生が考えた内容で授業をつくっていけるように、ノートもフリーであるのが良いかと今のところは思う。

齋藤委員 私もノートの「ある」「なし」で非常に迷った。意見を述べられる子であれば、先生もその子の考えていることが分かるが、意見を述べるのが苦手で、でも心の中では一生懸命訴えているような子の場合はノートがあったほうが自分の気持ちを書き込みやすいのではないかということも思った。

ただ、今回初めて道徳科という形になるに当たっては、まずは先生方、指導者がいかに教科書を利用していくかというほうがノートに左右されないでいけるのではないかと思ったので、最終的には私はノートのないほうを選んだ。

教育長 ノートのあるなしですぐ決定するという考えはない。参考に今お聞きしたというところである。

ここからさらに2者に絞っていきたいと思うが、A、D、E、G者から2者に絞るとすると、今野委員はE、H、G者を推薦され、H者は先ほど全体の中で外させていただいたが、E者、G者というところで特にご意見あるか。

今野委員 日本の歴史を変えた人とか世界で活躍されたというような観点から、ぜひ杉原千畝とエルトゥール号という二つは入れたいと思っている。その二つとも入っているE者にしたい。ノートはどちらでもいいと思っている。

教育長 今野委員はE者、G者としたらE者のほうをさらにということである。

吉田委員はA、D、G者というところで先ほど絞り込んでいただいた。この中で2者に絞り、ご自身なりに順位をつけるとしたらどのようになるか。

吉田委員 今、仙台市が置かれている状況はクローズアップしなければならない、緊急性があるとすれば、いじめコーナーがどういうふうに設けられているかということも一つの観点かと思う。G者は内容項目が多いのだが、いじめコーナーはない。やはり子どもたちに強く印象付けるために、いじめのコーナーがあるA、Dという考えになるのかと。

教育長 A者とD者とするとどちらを特に推薦するか。

吉田委員 もう一つ、授業のあり方で、教師と子どもたちがつくり上げていくということを基本に考えると、やはり教科書の中に設定されている発問というのはある程度少ないほうがいいと思っている。そうしたときに、A者は完全に二つ。そして、低学年は冒頭に一つある。D者は二つから三つの観点で発問しておいて、プラス実践化に向けた問い掛け、投げ掛けがあった。そういう数の面から考えるとやはり少ないほうがいいという私の基本的な考え方があるので、A者、次いでD者となる。

教育長 齋藤委員はA、D、C者を挙げていただいたが、C者は外させていただいた。A者とD者という中で推薦順位はあるか。

齋藤委員 本当にどちらも甲乙つけがたいと思っているが、すべての点を考え、教科書の流れ的なものを見ていくとA者を推したいと思う。

教育長 加藤委員はA、E、G者だったわけだが、3者とも先ほどの4者の中に入ってい

た。その中でまず2者としたらどうか。

加藤委員 先ほどの順でもA者とG者だった。それで、いじめという点から見て大変挑戦的な取り扱いをしているのでEを加えたのだが、ノートについては私も同じで、発問数からするとG者も大変コンパクトだったが、A者もG者も両方同じく少ない発問で授業という形なので、視点は同じでA者とG者になる。

教育長 さらにA者とG者でという点で絞り込むとしたらいかがか。

加藤委員 なかなか難しい。

教育長 では、まだ保留でも結構である。

中村委員が推薦されていたF者は外させていただいたが、A者とD者が残る。その中でご推薦できるか。

中村委員 A者もD者も甲乙つけがたいところだが、先ほどから皆さんがおっしゃっているように先生の工夫のしがいがあり、授業の時間内でより考えを深められるという点では、発問のそんなに多くないものがあるのかということが自分の中ではあったので、どちらかといえばA者を。

教育長 花輪委員はD者とE者ということであったが。

花輪委員 ノートのあるなしでまず二つに分けて、その中で選んでいったが、どちらが良いのか本当に分からず、皆さんのご意見、現場でご発言された先生方の意見を聞いて決めようかと思ってここに臨んでいる。ノートなしの方ではD者、A者という順番だった。それで、3番目はどうかと言われてA者と答えたのだが、私の中ではD者のほうが良いかなと思っている。

両方とも本当にいい。A者は独自の教材が非常に多く、D者は非常に学ぶタイミング、季節とのタイミング等々も特にここは重ねてあって、なかなか好ましい配列の仕方をしている。それから、設問はややDの方が多いかもしれないが、両方とも同じぐらいとなっている。D者、A者の順序なのだが、ほとんどイコールである。

教育長 E者ではなくて、D者、A者という理解で良いか。

花輪委員 ノートに関して、先ほどの議論により変えたということである。

加藤委員 質問だが、問いについて、量は目で見てすぐ分かるが、質については、これまでの専門委員会等ではどのような議論があったのかを教えていただきたい。

教育長 発問の質の点で、専門委員会や協議会等で何か特徴的な話はあったか。

教育指導課長 調査研究に携わった先生方のご意見として、これまでは読み物教材の登場人物の心情に終始する発問が多かったが、物事を多面的・多角的に捉えたり、自分とのかかわりで考えさせたりする多様な発問が工夫されてきているという意見があった。また、教材の導入として、授業後半には自分の生活を振り返ったり、自分の生活につなげたりする発問も工夫されてきているといった意見を頂戴した。

加藤委員 ここで議論になっていることと一致しているかと思う。確認だった。

教育長 先ほど加藤委員は甲乙つけがたいということもあったが、皆様の意見を整理すると、A、D、E、G者の中で2者にある程度絞れるかと思う。EとGという意見もあったが、AとDがそれ以上に多く意見としてあった。

そこで、A者とD者の2者に絞り込んでさらに議論を深めていきたいと思う。今野委員はいかがか。

今野委員 D者は「きみがいちばんひかるとき」というキャッチフレーズが良いなと思っ



たが、それを除いて考えるとA者でいいかと。

教 育 長 まだA者、D者、どちらという決め方はしないが、この2者で議論を絞り込み  
させていただきたい。

仙台市の最優先課題というのはまさにいじめ防止対策、自死防止ということにある。さらにもう一つは東日本大震災という大きな災害を受けて防災教育も進めている。そういう仙台ならではの特徴も踏まえ、さらに子どもがそれをしっかりと自分の血となり肉として身に付けて行動にしっかりと反映できるような教科書であってほしいというご意見、また、教える側もある程度自由度も持ちながら教えやすい、また進めやすい教科書というようなご意見があったかと思う。

そういう点でA者、D者の中でさらにこれを1者に絞り込むとしたらということで、またあらためてご意見を一通りお聞きしたい。中村委員いかがか。

中 村 委 員 やはり甲乙つけがたいところではあるが、いじめというところでの考え、それから発問の数というか、自由度、先生の工夫のしがいがある、そういったところを考えると今の時点ではAかと思う。

教 育 長 先ほどの考え方と同じということか。

中 村 委 員 巻末の資料なども両方とも同じように文化・伝統が分かるようなところもあるし、そういった点ではやはり少しだけA者のほうが良いかと思う。

教 育 長 齋藤委員もA者、D者で先ほどA者だろうというお考えだが、あらためていかがか。

齋 藤 委 員 子どもたちが最初に出会う道徳科ということで考え、1年生の本を見ると、A者もD者も非常に子どもたちの目を引き、読んでいきたい、これから一緒に学びたいという気持ちになると思う。その中で、どちらかというとならA者のほうが子どもが見て1年間の流れが見えてくるかということを感じたので、A者を推したいと思う。

教 育 長 吉田委員もA者、D者という中でA者のほうをご推薦だったかと思うが、あらためていかがか。

吉 田 委 員 本当にどちらの発行者も素晴らしい教科書だと思うが、例えば45分間の授業の中で文意を早くつかむということ、話し合いに合わせて「考え、議論する道徳」にしていくということ考えたときに、読みやすさというのはポイントとなるだろう。例えばルビのあり方とも関わるが、A者の場合は既習漢字をベースにしている。また、文章は、D者では原文に近いもので構成されているが、A者はそれを切って簡潔にまとめている。D者のほうが物語に浸ることができるが、やはり文意を早くつかむということからすれば、ある程度簡潔にしたほうが良いと思われ、そういった点で、A者かと思っている。

教 育 長 花輪委員は先ほどA者、D者に修正していただき、さらにそういう点でD者のほうという話だったが、あらためてAとDを比較していかがか。

花 輪 委 員 A者もD者もそんなに大きい差があるわけではもちろんなくて、トータルとしてフレンドリーなのはどっちかということを考えていたのだが、確かにA者、D者を比べるとA者のほうは設問がきちんと二つ、1項目ずつと決まっており、先生方のほうで工夫できる余地があるのかと思う。

それから、学習の進め方が1年生から4段階で「気づく」「考える」「話し合う」「振り返る」「見つめる」ということで非常に明快である気もする。

また、付録の補助教材のところで「出会う」「ふれ合う」「つながる」等の題材を適切に選んで挿入されているということで、私はここに出席するまではD者を挙げておいたが、A者もD者も非常にすぐれた教科書であると再認識した。

教 育 長 加藤委員。

加 藤 委 員 残したのがA者とG者だったので自動的にA者になるが、ただ、実はD者については情報モラル、いじめ、人権、特に人権について大変積極的に取り上げていただき、しかも目に見えない障害のこととか子どもの権利条約などもそのまま載せている。A者を挙げるが実際に授業をやっていくときには、こういったD者の取り上げたような部分が副教材や先生方の添えられた自由度の中でやっていっていただきたいという思いである。推すのはA者である。

教 育 長 今野委員、最後になるが、あらためて今回A者とD者という意見に絞られた中で、今野委員のお考えで改めてA者とD者を比較するといかがか。

今 野 委 員 地元の題材、特に東日本大震災関係で見るとA者のほうが少なくとも5か所は見つかり、そういう意味でA者が親しみやすいのかと思う。

教 育 長 今いろいろご意見いただいた。この2者の点でいろいろご意見いただくと、花輪委員がD者、A者という順序だったが、先ほどのお話の中で基本的にどちらもすぐれているので特に順位にはこだわらないという趣旨のご発言かと。

そして、ほかの委員の皆様はA者のほうをご推薦というお話かと思うが、そうすると小学校道德の教科書については6人の委員の皆様A者で絞り込むという形で集約される。

なお、この件について附帯意見というか、先ほど加藤委員から少し副読本での工夫をというようご発言もあったが、あらためていかがか。

加 藤 委 員 授業という短い時間で子どもたちが心を考えるということ自体が大変難しいことだと思う。本当はもっと時間を掛けて一つのことを丁寧に、場合によっては一つの素材を2回でも3回でもやっていただきたいぐらいである。35項目全部をやればいいということではないのだと思うのだが、そこら辺の先生方の裁量もできれば認めていただきたい。必ず全部最後までやるというより、このところを重点的に何回でもやりたいということが認められるといいと思う。子どもたちが1時間の中ですべて気付くわけでもなく、家で話を聞いてまた考え、友達としゃべってまた考え、そういったことからだんだんに分かってくるという部分を道德がどう吸い上げていくのか、1単元1時間ということにかちっと終わらせていくのではない、もっと緩やかな、心に届く授業というものを一方では考えていかなくてはいけないのではないかと思っている。

教 育 長 今のご意見に対して事務局は何かあるか。

教 育 指 導 課 長 学習指導要領の解説に基づいてお話しすると、一つの主題について今ご指摘のように2単位時間にわたって指導する必要もあると。また、重点的に指導しようとする内容項目に関する指導については、年間の授業時数を多くとる必要があるということで明記してある。現場のほうにもそのように指導してまいりたいと思う。

教 育 長 ほかにご意見等あるか。

吉 田 委 員 編集に関するお願いだが、推薦されたA者とかD者とかノートのない教科書の中に、例えば「学習を振り返る」とか「まとめ」という記入欄が示されている。

そのスペースを見たときに、本当にこれは子どもたちの発達段階に合わせたスペースのあり方なのかと疑問に思う部分がある。

例えば2年生、3年生だったら字の大きさがある。その中に1時間を振り返ってまとめることが可能なかどうか。形だけでなく、実際に機能する、効果のある記入のスペースも配慮してほしい。逆に言えば、わざわざそれを設けるよりは完全に学校で準備するノートに委ねるぐらいでもいいという気もする。

それから、今回、初めての教科ということもあってかと思うが、教科書全体に子どもたちにとっても教師にとっても親切的教科書編修になっている。しかし、余りにも丁寧で、そういうところに主体的学びとはどうかかわればいいのかというちょっとした疑問も抱いた。

教 育 長 教科書になったという点で、各教科書発行者の熱意と力の入れようがあったのかと推察される。そういう中で絞り込むという作業はなかなか大変だったかと思うが、今の皆さんのご議論を踏まえてA者を採択の候補としたいと思うが、よろしいか。

(一同、首肯)

教 育 長 それでは、小学校道徳については以上ご議論いただいた内容をもとに採択理由を事務局に整理していただき、28日に最終的に決定したいと思う。

## (2) 仙台市立特別支援学校及び特別支援学級で使用する教科用図書【一般図書】

(特別支援教育課長 説明)

教 育 長 引き続き特別支援学校・特別支援学級で使用される一般図書について協議を行いたい。特別支援教育課長より説明願う。

特別支援教育課長 別紙資料3、平成30年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書に関する資料2、一般図書についてご説明する。

ページを1枚お開き願う。こちらは調査研究委員会から出された一覧(案)である。1ページでは、新規候補本として小学部・小学校用7冊、中学部・中学校用2冊の計9冊が適切であるとの報告を受けている。この表の見方だが、上の項目にある種目という用語は教科と同じ意味で使われている。また、番号の欄にアルファベットで示しているのは仙台市が独自に候補とした図書である。数字で示しているのは宮城県で選定した図書を表している。

2ページは、昨年度まで採択していた一般図書のうち、今回品切れで増刷予定のないものや絶版となったものであり、供給できない図書及び宮城県が選定資料への掲載を取りやめた5冊を挙げている。これらの本は、平成30年度は教科用図書として物理的に採択はできない本となる。

3ページは、中学部・中学校用で教科用図書として適していないとの意見があった本2冊である。後ほどご説明する。

4ページから8ページまでは、昨年から継続して採択している候補本である。継続候補本の総数は138冊である。

次に、報告書である。それぞれの本について説明する。ここではA3判縦長の報告書を用いて説明する。

1 ページ目は、新たに加える本、新規候補本についてである。

こちら9冊のうち上から2番目、生活63「読んでみて楽しい日本地図帳増刷改訂版」は、低学年や中学年用としては難しい内容である。むしろ中学部・中学校用としてのほうが適しているという意見があった。理由としては、小学校の通常の学級で使用している地図帳よりも内容が難しく、データを読み取る力も必要なこと、文字が小さく読みにくいこと、現在中学部・中学校用に入れている地図の本よりも内容が難しいとの意見だった。このことについては教科用図書協議会においても同様の意見が出され、中学部・中学校用が望ましいとの報告をいただいた。

そのほかの8冊について、対象における評価はいずれかの欄に二重丸や丸の記号で示されており、適しているとの意見が挙げられている。協議会においても、子ども同士のかかわり合いに発展できる、シンプルな内容がよい、生活の中で生かせる工夫がされているなど、一般図書に加えるのに適しているとの意見をいただいている。

続いて、縦長の報告書の3ページだが、検討結果を一覧で表した資料である。

先ほどの生活63「読んでみて楽しい日本地図帳増刷改訂版」については省略する。

続いて、候補本の中で教科用図書として適していないとの意見があった2冊である。

まず、中学部・中学校用保健体育13「子どもの生活6 丈夫な体になれるよ」は、1990年に出版された本である。丈夫な体をつくるためにすべきことを具体的に書いている本である。これを適していないとした主な理由については、断定的な表現が含まれている、特別な支援を要する生徒の教科用図書としては適さないという意見だった。例を挙げると、「テレビゲームはなぜ悪いの」の答えとして「機械だけと遊ぶ子は友達の気持ちがわからない子になってしまう」とある。また、「足を高く蹴り上げられない子は運動不足です」との記載がある。特別に支援が必要な生徒への配慮に欠けるとの意見があった。協議会においても同様の意見が出されている。

次に、職業・家庭24「リサイクル図工図鑑」は、1993年に発行された本である。牛乳パック、紙皿、新聞紙などを使っておもちゃや道具を作り遊ぶという内容である。紙皿カスタネット、新聞紙けん玉など50ほどの例が掲載されている。これを適していないとした主な理由については、職業・家庭という教科の目標にはかなわないということが挙げられていた。現代においてはこの本の内容を中学生が生活に生かす場面はないのではないかという意見もあった。協議会においても中学校の職業・家庭に合わないと感じる。また、絵が古く白黒での表現となっており、子どもの興味を引くのが難しく適さないとの意見があった。

次に、番号A「サザエさんと日本を旅しよう」につきましては、調査研究委員会で中学部・中学校用よりも小学部・小学校用としたほうがよいのではないかという意見があった。理由については、各県ごとに代表的な観光地が整理して掲載されており、小学生が都道府県を学ぶのに適している、また、サザエさんというキャラクターが身近で興味関心を持たせやすいのではないかという意見だった。これに基づいて協議会においても小学校で採択されると中学校でも使えるので、

幅を広げるという意味で小学校用の図書とするのがよいという意見が出されている。

そのほかの継続候補本について、対象欄における評価はいずれかの欄にも二重丸または丸が記載されている。

本の詳しい内容については閲覧の時間に手にとってご覧いただきたい。

最後に、協議会で出された主な意見をお伝えする。本の発行年月日が古い。挿絵、用語が一部古い。写真が白黒である。現在は使われていないものなどの絵があり、分かりにくい部分もあるが、中身が全く適さないわけではない。大事な内容が掲載されているため、指導する側が十分理解し、必要な内容を補いながら留意して使用することが望ましい。

また、中学部・中学校用の候補本としているもので書名に「小学生のための」となっていたり「幼稚園」という言葉が入っていたりするので、中学生が使用する際は指導者がきちんと説明した上で使用するよう留意してほしい。また、指導の際、配慮が必要な図書に関しては使用している学校へそのことを伝えてほしい。

以上のような意見があった。

教 育 長  
花 輪 委 員

ただいまの説明に対して何かご意見、ご質問等あるか。

1 ページを見ると小学部・小学校用として7冊選ばれている。どのくらいの候補の本があって結果的に7冊なのかと。また、1年の間にどのくらい更新しようとかいうガイドラインのようなものはあるのか。

特別支援教育課長

毎年少しずつ、内容が古くなっていたり、時代に合わなくなっていたりする本が出てきており、平均すると2、3冊は候補から外している。あらためて新しい一般図書からということは、今回の場合だと小学部・小学校用7冊、中学部・中学校用2冊ということだが、その年によって良い本は仙台市独自採択の方向で候補として挙げている。毎年このくらいの数を替えている。

花 輪 委 員  
特別支援教育課長

対象となる本はもっと多いのか。

書店で売っている市販のものから、できるだけ教科に応じたものをピックアップしているので、そんなに多い冊数ではない。

吉 田 委 員

意見だが、候補の本でふさわしくないという本があった中で、中学校の保健体育はまさに適切な配慮をしていただいたと思う。障害の内容によっては教科書の意味が分かる生徒はいる。そういう中で今までこういうものが使われてきたのが逆にどうだったのかということはあるが、不適切として扱っていただいたことに配慮があったと思っている。

特別支援教育課長

併せて、中学校の新規の本で美術のイラストブックだが、これは美術のほかにもどんな学習場面で活用することを意図しているか、教えてほしい。

イラストブックについては、美術の時間以外にも、学校生活全般の中で、例えば体験的な学習の中など様々な場面で活用できる本である。生徒によっては、漫画やイラストに興味を持ち、自分でも描くなどして楽しめる場合や、友だちとのコミュニケーション手段として活用する場合も考えられる。また、コンパクトにできている点は、持ち歩きにも便利であり、日常的に使える本である。

吉 田 委 員

美術は開放的なものなので、美術の時間とこだわらないで、ほかの生活場面とか学習場面でこういうイラスト集なんかをどんどん活用していただければいいと思っている。

教 育 長 ほかにあるか。  
では、短い時間だが閲覧に移りたいと思う。

(図書閲覧 午後 5 時 13 分～午後 5 時 27 分)

教 育 長 閲覧していただいたが、何かご意見、ご質問等あるか。やはり見ていただくと具体的にわかりやすい。

吉 田 委 員 先ほど意見として申し上げた保健体育の記述内容を確認させていただいた。まさに不適切だったと思われる。そこをよく見つけていただいたと思っている。あらためて感謝申し上げたいと思う。

教 育 長 ほかにご意見、ご質問あるか。  
それでは、一般図書について特にご異議もないので、別紙資料 1、報告、別紙 2 の一般図書にある図書全てを採択する方向でよろしいか。

ご異議がないので、ただいまご審議いただいた内容を採択理由として事務局に整理をしていただき、次回 28 日の定例教育委員会に付議することとする。

以上で平成 30 年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択についての協議を終了する。

#### 4 閉 会